瑞▼掛合衣川ー大関英子、諸遊清風▼掛合大物の浦ー内田旭章、林田旭史▼掛合春秋賦ー木原綾子、平田由美▼講評ー田辺秀雄先生。

錦・都派琵琶

十月十六日(火)午後五時東京日本橋第一証券ホール、主催錦穂後援会、後援日本琵琶楽協会ほか。各流派名手賛助出演。故郷の道ー阿井染▼城山ー鈴木▼掛合五条橋ー佐々木穂紅、丸田穂容▼青葉の笛ー松井穂栄▼峨峨野ー深谷穂繁▼白虎隊ー藤原穂静、都穂鳳▼曽我の里ー甲田勧水▼井伊大老ー都穂苑▼千曲川ー杉山旗水▼琵琶舞踊熊野ー穂静、穂鳳、穂苑、錦穂・立方二、吟一▼乃木静子夫人の歌ー仲川秀邦▼夜討曽我ー輝錦統、輝錦凌・紘錦穂▼衣川ー原島旭粧▼湖水渡ー石坂鶴朋▼本能寺ー会主都錦穂。外に詩吟三・舞踊松井穂栄。

物故会員追悼各派琵琶演奏会

十月二十一日(日)正午京都東山仁王門バス停前本妙寺本堂。京都琵琶協会、一水会京都支部、薩摩四明会共催。（次号詳報）

筑前琵琶旭会全国大会

十月二十七、八両日(土)(日)午前十時鹿児島市中央公民館、司会鹿児島旭会。（次号詳報）

琵琶と詩吟詩舞の会

十月二十八日(日)正午西宮市夙川公民館松下ホール、主催三浦蓮水女史。（次号詳報）

阿部秋子琵琶の祭典特別公演

十月二十八日(日)昼名古屋中小企業福祉会館、主催名古屋秋声会。（次号詳報）

第十九回錦心流演奏会

十月二十八日(日)午前十時半、逗子市立図書館ホール、主管鉦水会。（次号詳報）

テレビ・ラヂオで琵琶・平曲放送

● 九月十二日(水)晩八時NHK・TVドラマ「風の隼人」で俳優が薩摩琵琶を弾奏する場面を普門義則氏が画面で弾奏を代って放映。

● 九月十四日(金)晩七時半NHK教育TVで平曲「那須与市」を井野川幸次検行(75)が説明のあと門下の三品、土井崎両検行及び今井勉氏三人の合奏で十五分間放映。

● 九月三十日(日)晩八時半NHK・TV「日本の響」で各種洋楽器に交って鶴田錦史、田中之雄両氏が鶴派琵琶を弾奏。

● 十月十一日(木)昼三時十分NHK・FMラヂオで「大楠公」友吉鶴心、「西郷隆盛」石坂鶴朋両氏放送。

――（予　告）――

○ 赤心流秋季琵琶演奏会　十一月三日(木)昼、静岡市城内婦人会館、主催赤心流鶴翁氏。東西の各流派名手数氏ゲスト出演。

○ 京都琵琶協会十一月例会　十一月十一日(日)昼一時、本部平井春嶺会長宅。

○ 一泊懇親旅行会　十二月二、三(日)(月)両日伊勢、志摩、鳥羽方面、主催日本琵琶楽協会関西支部。

○ 各流派琵琶演奏大会　十二月七日(金)正午東京日本橋第一証券ホール、主催日本琵琶楽協会。

あとがき

十一月という月は一年のたそがれ、厳しい冬が訪づれる前の一と時の明かるさ穏やかさを楽しめる季節である●並木道に散りしく枯れ葉を受けながらそぞろ歩きをしていると、つい琵琶歌の一節を口づさんでいるのに気づいて苦笑することがある●筆者は去る八月の暑いさ中に涼しい奈良県吉野郡の山の中を二日間自動車で敢策するチャンスに恵まれた●楠公苦戦の千早、赤坂城趾や山中に散在する十津川村、護良親王遺蹟の大塔（おうとう）村、今若・乙若を左右に、牛若を懐ろに、幼児三人を連れた常盤御前が当てもなく雪中をさまよったであろうという吉野の草深い山道●また十月には九州の太宰府に菅公を祭る天満宮に参詣の機会を得て悲劇の主人公菅原道実の人柄を偲んだ●これら琵琶歌に関係の深い史蹟や旧跡を実地に見学して置くと、自分がその琵琶を弾奏するときにおのづから実感が湧いて来て一入熱が入いるのを覚える●本号は季節柄各地で催された記録の報道記事の輻輳で折角御執筆下さった二、三の貴重な文章を割愛して次号以降に譲る結果となった、いつも同じような佗び言で恐縮だが紙数の都合上悪からず御了承頂きたい●しかし全国各地で開催される琵琶関係の行事が年を追って盛んになりつつあるのは誠に結構なことで編集子の嬉しい悲鳴である、どうか今後益々活躍されんことを希ってやまない。

昭和五十四年十一月一日発行（非売品）
編集者　植村　紘
発行所　京　奚　社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話〇七二六（七三）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第三〇五号　京絃社

琵琶（一三）

ー忘れられんとする音の世界ー

村山道宣

地神琵琶の成り立ち（中）

（前承）三徳院の御堂内部正面には、神仏が整然と並び祀られていた。中央には帽子をかぶり、琵琶を抱え端座している　色付けのしてある木製の貴人像が置かれていた。その左手には不動明王、右手には鏡の御神体（天照大神）が安置されていた。私はその木製の貴人像にじっと目を凝らしていた。その上品な貴人は斜めに琵琶を構え、前方に静かな眼差しを向けていた。その琵琶は天神が取れてはいたが、朱色で形状のはっきりと解るものであった。私はその琵琶の棹の部分に黒く描かれている柱の数に興味を持った。

乗絃（じょうげん）方より数えて三番目に当たる柱が、手で隠されてはいたが、その琵琶には確かに五個の柱がつけられていた。五個という柱の数は、粉れもなく平家琵琶の特色を良く示していた。私は嬉しかった。三徳院の一面の琵琶と貴人像の持つ琵琶は、地神琵琶の成り立ちについて考えるための重要な手がかりを与えてくれているように思えたからである。貴人像の製作年代については、定かなことは判らない。ただ、像の表面の状態や台坐の様子などからして、かなりの年月を経過したものであろうことは容易に推測された。琵琶の製作年代もまたかなり昔に遡るであろうと私には思われた。御堂に置かれていた琵琶の形態や、貴人像の抱いている琵琶の柱の数などから推測して、かつて三徳院、さらには南九州の盲人達は、平家琵琶と何らかの関わりを持っていたのではないかという微かな思いが、私の脳裏を過ぎったのであった。

景清琵琶

もう一つ別の話を照介しよう。私が、宮崎県の常楽院法流に属する地神盲僧、川崎貞鏡氏の寺を訪ねた折りの話である。その寺は平家の悲劇の武人、平景清（一一九六年没）が祀られている景清廟のすぐ近くにあった。寺の脇にある小さな御堂には、作られてから相当の年代を経たと思われる。黒っぽく変色した琵琶がガラスのケースに入れられ大事に保管されていた。川崎さんはその琵琶をケースから取り出して見せてくれた。それは三徳院にある地神琵琶と全く同形のものであった。また、その琵琶には一通の由来書が付せられていた。由来書には景清の来歴が、また景清八幡宮（没後、景清が祀られた）に、その琵琶が安置されていたということ等が書かれていた。由来書の内容の真偽はともかくとして、日向やその周辺地域に於いて、景清伝説に対する信仰は大きなものがあったのである。それは、これらの地域に平景清にまつわる旧跡、その他が数多く見られるということを見ても明らかであろう。その昔、琵琶法師達は景清にまつわる説話を琵琶に乗せて語り歩いたのであろう。屋島、壇の浦の合戦に於いて、平家方の侍大将として大いに奮戦し勇名をはせた景清は、戦いに敗れ日向に流された後、目を抉って盲目となり、琵琶法師として一生を送った。（この景清の伝説は謡曲や浄瑠璃の題材ともなり諸国に広まった）また、景清は、盲目の人や目を患う人の信仰を一心に集めている生目（いくめ）八幡神社（宮崎市生目町）の祭神でもある。景清は盲目の琵琶法師達にとって、彼等の由緒、素性を高める存在であり、シンボルでもあったのであろう。（此項未完）

五絃閑話（二）

水藤五郎

今日、民謡ブーム、詩吟ブーム等と云う言葉をよく耳にする。また、邦楽ブームと云われることもある。

テレビ、ラジオを始めとするマスコミでも民謡がとりあつかわれる機会は多く、これに呼応するかの如く、三味線、尺八等の通信指導、販売の宣伝が大きくのせられている。詩吟についても、マスコミで取り上げられることは少ないながら、その愛好人口はかなりの数にのぼっている。

邦楽ブームと言われるのは、これ等の流行、隆盛をも含めての、伝統邦楽の広がりであって、邦楽の新しい愛好者の誕生を意味するものである。ただ、邦楽の範囲と云うか、この邦楽が、日本の伝統音楽の全てを指す場合には、邦楽ブームの中に琵琶も含まれていると解しても良いのかも知れない。しかし、これに反して、邦楽を近世邦楽のみの狭義に解するなら、琵琶はその中に入れられることはないのが通例となってきた現実がある。則ち、近世邦楽と称される箏、三味線、尺八、鼓等の楽器、声楽と琵琶は、その音楽土壌を異にしてきた一面がある。勿論、音楽史をさかのぼれば、琵琶と他の楽器との関係が無縁であったわけではないし、今日の琵琶の中にも、箏曲や長唄との関係を持っているものもある。邦楽の中に琵琶が含まれない時、邦楽ブームの外に琵琶は置かれることになる。

今日の邦楽ブームは、近世邦楽のみでなく、広い範囲の伝統邦楽をも含めてのそれであって、その頂点が民謡や詩吟のブームとなっているものと私は解している。

では、何故、琵琶がこの様なブームの外にあって、今日の衰退を呈しているのであろうかと考える時、いくつかの問題が浮かび上ってくる。

多くの人々によって、琵琶の改革案が述べられてきた。それ等の多くの案の中で、最も共通しているものは、琵琶の題材と詞章の問題である。則ち、琵琶は語り物音楽であることから、その語るべき内容がどの様なことであるかが、現代人に判るものであることが絶対条件であって、そのためには、今日の演奏詞章では難かしすぎるので、新しい詞章による、新しい題材の創作が必要であるとの案であった。これは琵琶のみに限らず、伝統邦楽の全てに共通するものであって、言葉を音楽要素にする以上、語り物、うたいものの区別なしに、判り得るものであることは絶対条件である。

話しを広げるならば、歌の全てがそうなのであるし、言葉そのものが判ることを要件として生まれているのである。音楽界にとっては、新しい題材と判り易い詞章は常に要求される条件なのである。琵琶にとってもこの点が要求されるのは当然であって、むしろ、これ以外の点、琵琶のみに見られる欠点を研究しなければならないのである。

歌詞の難かしさが原因で、何を語っているのか判らないとの意見は琵琶に限らず、三味線の語り、義太夫をはじめとする豊後節、古曲等の多くに共通することである。そこであつかわれる内容も言葉も、琵琶と同様に過去の人物であり、江戸を中心とした風物である。或る部分について云うならば、琵琶を解する以上に難かしい点もあるのである。ではこの判りにくい近世邦楽を今日に伝承せしめている力は何であろうか。

（此項未完）

土佐の甲の浦
江藤新平遭難の地を訪ねて

辻旭城

歴史と文化の散歩道となっている阿波の徳島、そして阿南から遠く室戸岬へかけての海岸線は、国定公園として四季を通じて釣り師や遊覧の人々で賑う景勝の地である。また〝阿波の松島〟といわれる絶景の橘湾もある。

淡路島からバスで福良の終点で下車、連絡船で阿波の国に上陸し、鳴戸線、高徳本線を

乗り継いで徳島へ、急行列車は牟岐どまりとなっている。牟岐からバスで行くと便利である。

トンネルを抜けると高知県、高い朱塗りの甲の浦橋を渡る。左側は甲の浦外港、右手に低く小さい内港がある。気をつけていないと見逃してしまうような小さな漁村である。

室戸までは約一時間、明治維新の際、坂本竜馬とともに京都寺田屋で、新撰組に刺された中岡慎太郎の巨像が海を睨み、黒々と連なる岬を太平洋の荒波が噛み砕いている。

さて、佐賀県とは如何なる所か、まづ事の起こりから説明しよう。はじめは楠の生い茂っていたところから米の都と呼び、後に米の字が佐嘉と変わり、更に現在の佐賀となった。気候は温和で、五穀豊穣の水筒江といい（佐賀の古名で、今は水が江町にある。）元はこの辺りは竜造寺家兼の居城地で、後に後裔隆信が引継ぎ、太守となって治世をしいた。

隆信が城主になると、近国に猛威をふるうようになり、武士は居館を構え、町も居城も大拡張され、化け猫で有名な鍋島が移り住むところには、三十五万七千石の大藩の城下町として栄えた。

江藤新平は、この佐賀藩の下級藩士から昇進して、明治政府での江藤の活躍ぶりは目ざましかった。まづ東京遷都、文部省の創設、三十九才で司法卿の栄職につき、藩閥政治に対抗して民選議院の設立を目ざした。又、三権分立と上下両議院、更に地方自治のための府藩県議院を設立しようと運動を続けた。

その後、参議の栄職につくことになったが、明治六年秋の末、征韓論で破れた西郷隆盛をはじめ副島、板垣らと共に下野したのである。

日頃親交のある西郷から乞われて佐賀に帰り、政府に反抗するために明治七年、江頭新平ら一派で佐賀城を焼討ちしたのであるが、これが後世に残る〝佐賀の乱〟である。（この内容については紙数の関係で省略。）

城を焼失したあと、同年三月二十三日、佐賀を落ちのびた江藤は、鹿児島に西郷南州を訪ね、薩摩藩の子弟のために設立している私学校を見て将来を語り合った。そして、船で瀬戸内海を四国宇和島から阿波、更に東京へ向わんとするその途中、三月二十七日、佐賀の乱の首魁としてこの甲の浦で捕えられた。

その時江藤ら同行三人は、漁港入口の熊野神社に近い旅館光屋に留められた。光屋は今は廃業してしまっているが、港の風情は当時とあまり変っていないと、土地の人達は云っていた。

ここで江藤は、三条、岩倉の両大臣に直接手紙を書いたが、その運命は、早くから九州に出向いて佐賀一帯を怪しいと睨んでいた目付役の内務卿、大久保利通に死活の実権を握られていた。果たして佐賀の乱が発生し、政府は犯人の逮捕に傾注していたのである。

捕えられた江藤ら一味は、高知港から軍艦で佐賀へ護送され、臨時裁判所で二日間厳しい審問が行われた末四月十三日、斬罪梟首という極刑が云い渡された。

江頭新平についての研究家中野英次は、次ぎのように書いている。

世間では余り江藤新平の名が知られていないのみか、佐賀の乱についても知らぬ人が多い。高知を始め四国筋の人々の中には、江藤らを逃がせてやろうという、一部の同情気分を持っている人もあった。という。

且つて司法卿の栄職にあった江藤は、東京に護送されて晴れの都大裁判所の法廷で、代弁を入れての堂々たる釈明をなし、その上で服罪するつもりであったという。

『琵琶きちがい』

京都　○　○　○○○

拝啓　いつも「京紘」お送り下され有難く、毎号有益な記事の満載で一々丹念に読ませて貰っております。

若い自分からただ無茶苦茶に琵琶が好きで、環境上稽古をすることが出来ないまま、とうとう老境に入ってしまいましたが、どんな琵琶会でも、演奏会と聞けば何をおいても、京阪神のどこへでも聴きに行く私で、これが本当のビワきちがいと自分でも思っています。従って琵琶を聴く耳は、誰にも負けないつもりで居ります。

ついては、素人（しろうと）の琵琶好きの一人として、最近演奏会で感じた点を二、三挙げてみました。立派な先生方の演奏会に、つまらぬことを書き並べてお叱りを蒙るかも知れませんが、どうぞ善意に御解釈の上お許し頂きたいと存じます。

(一) 薩摩も筑前も、それぞれ良い点があるのは云うまでもありませんが、京都琵琶協会様のように各流派男性女性の先生方が、交互に演壇に上られるのは大変良いと思います。聴衆の中には招待状を貰ってお義理半分で来ている人もありましょうが、流派色彩を異にした先生方の交互演奏は、聴客足留めのためにも効果的だと存じます。

(二) 一曲の演奏時間は十五分か精々二十分までが良ろしく、長い曲は二人か三人で上、中、下と分奏して下さい。歌詞の中抜きは歯が抜けたようで感心しません。素人の私が考えるような簡単なものではないかも知れませんが……。

(三) 一回の演奏会は三時間半乃至四時間が限度で、それ以上長くなっては聴く人を飽かせましょう。私のように芯から琵琶の好きな者は六時間でも七時間でも退屈しませんが、一般聴衆の事もお考えになる必要がありましょう。

(四) いつか「京絃」に戦争ものの演奏忌避の記事が出ていたと記憶しますが、私は反対で、明治、大正生まれの私らには思い出の種となり一喜一憂します。戦争もの大いに結構、是非取り入れて聴かせて下さい。

(五) 各演奏前にその歌詞の簡単な説明をなさるのは結構なことと存じます。私のような古狸は兎も角、琵琶に馴染の薄い人には大いに参考となりましょう。但し解説は極く簡単に、精々時間を取らないように。

(六) 琵琶演奏に舞踊を取入れて舞台面を賑やかにするのは結構なことで、琴、尺八、三絃などの邦楽器伴奏を組込むのも新規軸として良い方法と思いますが、兎もすれば肝心の琵琶が他の楽器や舞踊に喰われてしまう恐れが無いとは云えません。主役は飽くまでも琵琶であるということを忘れないで下さい。

（匿名希望）

第二十二回福井県芸術祭参加「一水会福井支部琵琶演奏会」に招かれて

京都　馬場鴨水

九月二十三日(日)、鯖江へは初めてであるが、五月に富山支部親善演奏会に参加した私にはなつかしの北陸線である。

京都駅八時十二分発「雷鳥」の指定席に坐す。湖西はふるさとである。見渡す田んぼは黄金の波を打って間近い刈入れを思わせる。敦賀を過ぎ武生に九時五十分。乗換して鯖江へ。

鯖江駅で彦根西川磯水さん、敦賀の山本港水さんにお出会し、共々車で市民会館へと迎えられた。

演奏会場は二階大広間百余畳で舞台の両側には菊花香り、金屏風を背景にした落ちついた会場である。

正午開演、若い方々六名の演奏を聴く。日ごろのお稽古と行届いた指導が伺われ、たのもしさ溢れる。

内田支部長、満堂の皆さんにご挨拶あり。次いで賛助出演は名古屋秋声会松浦さん、田中金沢支部長さんら、富山支部員さん、福井支部員さん合せて十名。熱演に熱演つづき、範を示され、個性豊かな演奏は聴衆を心ゆくまで楽しませた。来賓阿部秋子会々長の華麗な芸風「八甲田山の露」を拝聴す。馬場鴨水「本能寺」演奏。

五時終演。写真撮影、ご盛会を祝しての和やかな祝宴。北陸の皆さまにお礼の意を表して帰途。米原から「こだま」で八時すぎ帰着す。

（九、三〇）

（演奏者と曲目は別項参照1係1）

水藤五郎さんの「五絃閑話（一）」を読んで

大阪　中條美治

京絃三〇四号に目を通していたら、その第

四頁に表題の感想記が出ていました。私はこれを読んでハタと膝をたたき「これこそ私も常々思っていること」と同感したのでした。

どの演奏会でも、賛助出演、或いは来賓というベテランの先生方の出演があり、私などもこれを一つの楽しみとして参聴するのです。

ところが、どの会でも終りの頃、即ち夕方近くになると、そわそわと退場者が殖え、肝心の来賓に気の毒な思い。なぜ日本人はこうもセッカチなのだろうと、賛助出演者のお気持ちを察し、腹立たしく思います。琵琶に親しむ程の人は、会場の空気を盛り上げるのが礼儀でしょう。

賛助者の多くは遠方から来られるので、主催者側としては終りの方へもって行った方がよい、と考えるのでしょう。一方、聴衆にしてみれば、早くよい演奏だけ聴きたい、との考えでしょう。しかし来賓とは「お呼び立てしたお客様」です。そのお客様を放ったらかしにして、とっとと先に席を外してしまう聴衆。これくらい失礼なことはない、況んやまだこれから演奏というに先立って帰るというに於ておや、です。

戦後は老いも若きも自己中心主義になり、自分さえよければ他人のことはどうでもよい一。嘆かわしいことです。

そこで一工風1主催者は一般出演者と聴衆との両方の思いの中間を採って、プログラムの中程に来賓を配置したら、と思います。そして会場に近い距離の来賓は終りの方に廻って頂く。（色々御都合もあろうが。）というようなことにしたらどんなものでしょう。そうすれば水藤五郎さんの「名人の神通力も通じない」と嘆かせないで済むと存じます。

錦心流琵琶演奏会

九月四日(火)午後二時、東京台東区上野本牧亭、谷暉水一門・一水会城東支部共催（千円）。忠度1村井栄水▼桜狩1高橋訓水▼月下の陣1時田揮水▼川中島1森基水▼俊寛(下)1羽賀舫水▼彰義隊1山田静水▼重衡1片岡松水▼薄陽江1寺本晃水▼別れの盃1関口発水▼城山の月1庄司伊水▼湖水乗切1松尾明水▼波題目1石崎禮水▼本能寺1谷津豊水▼噫小野訓導1矢内皆水▼西郷隆盛1鈴木謙水▼船弁慶1小林闢水▼良寛1小川纜水▼横笛1松崎葉水▼白虎隊1座間燈水▽巡礼お鶴1関恵水▼武蔵野1佐藤釆水▼天目山1山崎典水▼夜討曽我1松本藷水▼敦盛1宮原琿水▼石童丸1谷暉水。

堺開口神社秋季大祭に琵琶奉奏

九月八日(土)午後三時、境内瑞祥閣、協賛大阪琵琶同好会。湊川1多和綾子▼湖水渡り1作花旭友▼坂崎出羽守1辻旭城▼安宅の関1石橋旭嶺▼井伊大老1田中歉水▼衣川1尾山旭瑞常▼外に詩吟、日舞、奇術など数番。なお辻旭城作詞、押川旭葉作曲「開口神社を偲ぶ」の録音テープが終日境内に流された。

日本芸術琵琶普絃会九月例会

九月九日(日)午後一時、東京文京区大塚の貸席京屋で開催。お江戸日本橋・門琵琶・伴流謡切第五弾法の連弾1錦幽▼城山1内田隆章▼忠度1坂入俊風▼琵琶小唄隆盛1山崎錦幽▼川中島1青木早水▼小野訓導1伊与田詩水▼雪の進軍1日比桜姥▼堅田落1若宮旭登▼静1高田栄水▼宮本武蔵1杉山旗水。以上研修を終り小宴の後六時半散会した。

錦心流琵琶演奏会

九月二十二日(土)午後五時半東京上野本牧亭、主催一水会本部企画部（千円）。川中島1杉本淳水▼金剛石1新井靖水▼桶狭間1小林政水▼横笛1塚原紳水▼俊寛(下)1満田鈴水▼茨木1青木釘水▼若き日の千姫1太白香水▼八甲田山1本庄宵水▼新曲紅葉狩1秋山溪水▼井伊大老1三門葉水▼異国の丘1杉山旗水▼本能寺1花俱圭水。

藤巻旭鴻演奏会

九月二十三日(日)正午東京千代田区大手町農協会館、主催旭鴻会、後援日本琵琶楽協会ほか（千五百円）。立派な表紙付プログラムで各曲目の下欄に歌詞の解説を附し東西各流派第一級の来賓出演で盛況を呈した。月に偲ぶ1藤巻旭恵▼秋風故郷の山1中村旭犀▼若き

敦盛ー林田旭史、内田旭章・絃旭鴻、旭彰・小絃旭陽・笛一、立方三▼綱館ー熊手旭宸、藤巻旭彰、古川旭神・絃旭粧、旭章・小絃旭桂▼玉藻の前ー藤巻旭陽▼新曲政岡ー木庭旭山▼唐人お吉ー会主藤巻旭鴻・笛一、立方一▼王昭君ー初谷旭憲・絃旭陽、旭宸、旭史・笛、琴、立方各一▼扇の的ー半田厚子▼彰義隊ー須田誠舟▼湖水渡りー笠旭洋▼伊達政宗ー水藤五郎▼対王丸ー富樫旭桂・絃旭鴻、旭彰、旭章・笛一、立方二▼石童丸ー桑名洲聖▼大物の浦ー原島旭粧▼浪曲琵琶父帰るー若水桜松・絃綾子▼二〇三高地ー会主藤巻旭鴻▼新琵琶楽(イ)荒城の月変奏曲、(ロ)黒田節ー唄藤巻旭鵬・大絃藤巻旭彰・小絃藤巻旭陽・正絃十八人・笛一、琴一、立方二。

錦心流琵琶演奏大会

九月二十三日(日)正午鯖江市民会館、一水会福井支部・県文化協議会共催、後援北陸琵琶連盟ほか（県芸術祭参加）。金剛石ー小柳▼扇の的ー河合▼吉野懐古ー玉木▼異国の丘ー内田▼柴田勝家ー小竹▼常陸丸ー西川▼城山ー吉野▼横笛ー野村蟋水▼白虎隊ー名古屋松浦秋翠▼血染の聖教ー岸本港水▼堅田落ー金沢星山溪水▼別れの盃ー富山石倉堂水▼新撰組ー西川磯水▼ひめゆりの塔ー富山戸田頌水▼曲垣平九郎ー同田中愛水▼西郷隆盛ー金沢水谷充水▼竜の口ー同田中篁水▼井伊大老ー会主内田景水▼（以下来賓）八甲田山の露ー名古屋阿部秋子▼本能寺ー京都馬場鴨水。

近県親善錦心流琵琶演奏大会

九月二十三日(日)昼十二時半、秋田市大町三丁目協働社大町ビルホール、一水会秋田支部・秋田琵琶連盟・秋田琵琶後援会共催、後援秋田県芸術文化協会ほか。城山ー佐藤道水▼川中島ー加藤快水▼粟津の巴ー佐々木芙水▼西郷隆盛ー佐山練水▼秋海棠ー高井新水▼白虎隊ー船木濤水▼伊豆の御難ー保坂遡水▼八甲田山ー竹内信水▼村上喜剣ー星野巌水▼茨木ー石川仙水▼舟弁慶ー新潟阿部妃水▼戦艦大和ー弘前中村光水▼新曲敦盛ー鶴岡辻有水▼松の廊下ー酒田佐藤烈水▼三井寺ー会主松井灯水。外に詩吟十題。

ちくぜん琵琶の会

九月二十四日(木)午前十一時半、神戸市生田区楠町神戸文化ホール、主催柴田旭堂会、後援兵庫県、神戸市ほか（八百円）。知事、市長その他の祝詞を巻頭に掲げた三十二頁の豪華プログラムで一曲毎に歌詞の解説を附記し会員の外各流派の権威を来賓に迎え盛会を極めた。四条畷ー平田旭甫、西沢旭朗・絃旭堂、旭海、旭禎▼かぐや姫ー川村直子、芳子・絃旭修▼新琵琶楽汐風乙女、黒田節ー旭朗、旭甫、慶世・絃旭楓外十三人・大絃旭冠・尺八入▼五条橋ー美喜旭悠▼綱館ー青木旭昶、野口旭碩、川村旭修・絃旭楓、旭禎、旭暉・大絃旭冠、小絃旭甫▼月に偲ぶー松尾旭苑▼那須与市ー田中旭冠▼秋風故郷山ー酒井旭韻▼架娑と盛遠ー首藤旭暉▼伽羅の兜ー空野旭昭、絃旭冠、旭碩▼茶道松風の曲ー宮村旭当、巽旭悦・絃旭堂、旭禎、旭碩・小絃旭甫・裏千家山藤宗哲社中五人▼羅生門ー村山旭勢▽華道華の恵みー旭禎、旭苑・小原流松井啓容外四人▼玉藻の前ー大籔旭晶▼発表曲李白と仲磨ー会主柴田旭堂・箏入▼一茶ー少女三人・絃旭暉、旭禎、旭甫、旭修・立方三人▼若き敦盛ー旭朗、旭甫・絃旭勢、旭暉、旭碩、旭冠・立方二人▼天の羽衣ー柴田旭優、金田、溝脇・絃旭晶、旭海、旭禎、旭甫・立方二人▼ながれー第一絃旭堂、第二絃旭晶外七人、第三絃旭悠外四人、大絃旭冠・クラシックバレエ上月倫子外六人▼湖水渡ー弓浜旭洋・絃旭堂、旭冠▼小栗栖ー高千穂旭楓▼衣川ー池田旭柴・絃旭勢、旭冠▼あつもりー大籔旭寿▼安宅の関ー富樫旭桂▼老公漫遊ー空野旭陽、絃旭堂▼本能寺ー平井春嶺▼橘中佐ー桝本旭風▼八甲田山の露ー前田秋声▼大物の浦ー会主柴田旭堂、柴田旭艶。以上の間を縫って詩吟七題。

琵琶まつり木原綾子演奏会

九月二十四日(木)午前十一時東京日本橋東京証券会館ホール、主催木原綾子女史、後援日本琵琶楽協会ほか、司会水藤万里子女史。会員の外各流派名流数氏を来賓に迎え三百五十人収容の会場には約四百二十人の聴衆が詰めかけて超満員の盛況を呈した。青葉の笛ー斉藤満保・絃綾子▼菅公ー永井▼母常盤ー油科▼桜花譜ー関▼扇の的ー平田▼琵琶舞小督ー

会主木原綾子外三人・琴、尺八、立方各一▼（来賓演奏）山科の別れー輝錦統▼大物の浦ー内田旭章、林田旭史▼宮本武蔵ー杉山旗水▼湖水渡ー木原綾子・尺八入▼村上喜剣ー友吉鶴心▼堅田落ー原島旭粧▼屋島の誉ー桑名洲聖▼琵琶舞踊羽衣ー木原綾子、水藤五郎、水藤万里子・小絃藤巻旭彰・琴一、笛一、立方二▼乃木静子夫人のうたー仲川秀邦▼二百三高地ー藤巻旭鴻▼茨木ー中谷襄水▼大石主税ー押田旭窈▼浪曲琵琶父帰るー若水桜松。絃綾子▼鉢の木ー遠藤鶴東▼経正ー広瀬圭穂▼坂崎出羽守ー加藤錦陽▼本能寺ー村木桜柳▼屋島懐古ー水藤五郎、水藤万里子、会主木原綾子。以上の外華道吟、書道吟（会主木原錦翠）をはじめ尺八、琴入りの詩吟、新体詩など二十八題。

全国大会出演者激励演奏会

九月三十日(日)午前十一時姫路市本城能楽堂、主催姫路旭会。三番叟ー竹本旭将・絃合奏▼赤垣源蔵ー武木田・絃旭操▼椎葉情緒ー宮口旭陽生・絃旭光、旭鳳、旭孝▼天の羽衣ー青柳旭千、鈴木旭鈴、別所旭美・絃旭八千代、旭操▼青の洞門ー山田旭晃・絃旭将▼小栗栖ー三宅旭栄・絃旭孝▼あつもりー大西旭恵・絃旭操▼坂本竜馬ー植村旭照・絃旭孝▼滝善三郎ー丸尾旭宝▼坂崎出羽守ー谷口旭孝▼伽羅の兜ー竜馬旭鳳・絃旭操▼橘中佐ー高千穂旭楓▼末練西行ー団野旭兜・絃旭操▼西郷隆盛ー竹本旭将▼安宅の関ー高垣旭晴▼壺坂寺ー近藤旭水・絃旭暢▼曽我兄弟ー高旗旭光・絃旭将、旭鳳、旭孝▼新撰組ー天津旭八千代・絃旭操、旭濤▼坂本竜馬ー秋元旭晨・絃旭将▼衣川ー梅原旭濤▼若き敦盛ー伊藤旭暢・絃会主西川旭操▼断琴ー坂田旭弘。

筑前琵琶橘会全国大会

十月六日(土)午前十時大阪東区本町の本願寺津村別院大講堂に於て開催、主催日本橘会、司会関西橘会、後援芸の友社。創業六十年を誇る筑前琵琶橘会の第十一回全国大会は橘旭宗家元、山崎旭萃宗範、堀田旭甲、板谷旭邑両大師範を始め院号、山号、師範、教授等の肩書を持つ全国の精鋭五十数氏が一堂に会して夕七時まで全四十一曲の独奏や合奏で覇を競い、殊に特別番組の「茨木」は当日の圧巻で歌矢吹旭美津、佐伯旭映、林田旭城・絃押川旭葉、板谷旭邑、山崎旭萃の六女史・立方瑞穂大二郎、鳴物藤舎社中の組合せによる豪華演奏を展開して拍手が堂を動がした。また三十六頁のプログラムは演目の総てに歌詞の説明を附記して聴衆を喜ばせた。尚前日の五日に演奏会場近くの「一力」に於いて本年度の総会、懇親会が開かれた。

薩摩琵琶正絃会秋季演奏大会

十月八日(月)正午東京日本橋第一証券ホール。花の白虎隊ー岩屋吟照▼足柄山ー若林鶴山▼形見の桜(二)ー山本嶺舟▼桶狭間ー佐藤湘春▼俊寛ー正木溪舟▼迷語もどきー城月舟▼彰義隊ー浜野錦宝▼吉野落(上)ー本橋仙舟▼薄陽江(上)ー古家絃風▼同(下)ー遠藤鶴東▼元寇ー伊集院牙城▼城山ー池野谷吟岫▼湖水渡ー清川嵐舟▼物狂ー堀越素舟▼白虎隊ー仲川秀邦▼畠山重忠ー軽部岳瑞▼真木の雫ー久留米島津天嶺▼裾野の曙ー岡部錦蝶▼光秀の最期ー京都平井春嶺▼川中島ー須田誠舟▼鉢の木ー静岡山本鶴声▼小敦盛(上)ー八束一峰▼同(下)ー栗原雨竹▼門琵琶合奏ー有志。

秋季琵琶演奏会

十月九日(火)午後六時酒田市今町吉祥閣、主催一水会酒田支部。物故会員四氏の追悼を兼ね併せて近県三支部の親善を計った催しで盛会であった。金剛石ー尾形▼送別ー高見▼花の若武者ー中鉢▼紅葉狩ー佐々木、西村、佐藤・絃佐藤彩水▼文福茶釜ー山本▼寂然無為朗詠ー藍水・尺八入▼母常盤ー長谷川▼村上喜剣ー阿部志水▼月下の陣ー渕上▼屋島の誉ー斉藤張水▼（清元）北州ー立方松島金寿▼安宅の道行ー鶴岡田中盟水▼道成寺ー新潟加藤陽水▼本能寺ー秋田佐山練水▼掛合敦盛ー上田宴水、佐藤智水・絃会主荒井藍水。

定例研究会

十月十四日(日)昼一時東京新宿洲鳳会館、主催日本琵琶楽協会（会費千円）。掛合五条橋ー佐々木穂紅、丸田穂容▼秋風故郷山ー板倉旭富・絃小原旭城、斉藤旭芳、若林旭洋、青木旭州▼迷語もどきー大富士岳鮮・絃軽部岳